

どの教会でも同じ曲を歌うために、「五線譜の楽譜」が発明され、これが西洋音楽の基礎となった。

交響曲は4つの楽章によって構成され、その順番も決まっている。だが、この基本から逸脱したものに名曲は多い。最初のルール破りはベートーヴェンである。『運命』『英雄』『悲愴』などの曲名は愛称であり、正式には何もない。何かの物語や情景を描いた音楽ではないのだ。基本的には、歌もない。

指揮者の役割ほどよく分からないものはない。当事者も、「科学的に分析して説明しろ」と言われると困るらしい。

オーケストラの演奏会のテレビ中継を見れば分かるが、大半の楽団員は楽譜を見ながら演奏しており、指揮者をずっと見ている人はいない。楽団員が指揮者を見ているのは自分が演奏していない時だ。

指揮者の仕事の大半はリハーサルの時に終わっているとも言われる。リハーサルを通じて、指揮者は「作曲家が楽譜に書いた意図」を解釈して、オーケストラに伝える。そして本番では一種の精神的波動を発して、オーケストラをコントロールしているらしい。

グリッサンド

すべるように急速に奏すること。ピアノでは、指を鍵盤上ですべらせてその間の全ての音を鳴らし、弦楽器では弦を押さえた指をすべらせる。

クラシック音楽のなかで、物語や情景を描いた標題音楽は少数派で、大半は「意味のない音楽」だ。「意味がない」というのは、「聴く意味」がないということではなく、何かを描写した音楽ではないということだ。聴いてみて、「何を言いたいのか分からない」と感じるのは正しいのだ。何も言いたいことなどないのだから。

そんな意味のないものを聴いて面白いのだろうか。これを面白いと思うには、やはりある程度の知識が必要となる。

曲の形式、曲の構造、曲の成り立ち、あるいは作曲された背景、作曲家の生涯や生きた時代についての知識があるとない

とでは、感じ方が変わってくるはずだ。

「標題音楽など邪道である、音楽は音楽そのもので物語などに従属すべきではない」という考えで、こうした考えの人々は「絶対音楽」(absolute music)という言葉を生み出した。「音楽のための音楽」である。

クラシック音楽の大半は「絶対音楽」で、標題音楽は例外的なものだ。しかし、有名な曲にはタイトルのある標題音楽が多いので、なんとなく、クラシック音楽は楽器だけで物語や情景を描いたものと思っている人が多いのだ。

音名とは

クラシック音楽の曲名には、「交響曲第1番」などの後に「ハ長調」など調が記されている。「ハ」というのは音名で、「ドレミファソラシド」の「ド」が日本語では「ハ」になる。音名は、音の高さを示す。音楽で使う音の高さにはルールがあり、それを順番に並べたのが「音階」で、音階によるシステムを「調」という。

ドレミとイロハの対応表

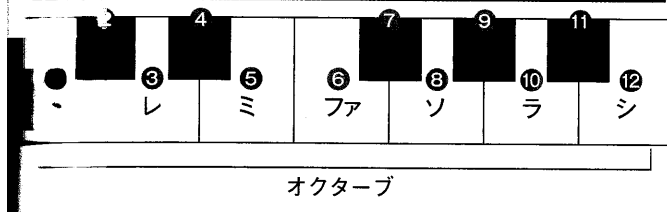
ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ
ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ

長調と短調

たとえば「ハ長調」は、「ハ音(ド)」を主音とする長調、と説明される。長調は明るい響き、短調は暗い響きがする。「明るい」「暗い」というのは、あまりにも主観的で、人によって違うのではないかとも思うが、一応、明るい曲にしたい時は長調、暗い曲にするには短調にすることになっている。

1オクターヴの中には12の音がある(下図参照)。それぞれに長調と短調があるので、24の調がある。この調を曲の途中で変えるのを「転調」といい、作曲家の腕の見せどころとなる。

ピアノ鍵盤



ソナタ

2つの主題をもつ。主題は、ひとかたまりのメロディー（リズム、ハーモニーも含む）のこと。

冒頭で第一主題が提示され、続いて第二主題が提示される。これを「提示部」という。続いて、第一主題が転調され、第二主題も転調される「展開部」となる。そして「再現部」が来て、終結する。

小学校の音楽の授業で輪唱をした経験のある人もいるだろう。同じメロディーを少しずつ遅れておいかけていく歌い方だ。こういう形式を**カノン**という。元の意味は「規範」「規則」だ。ただ、輪唱は同じメロディーをそのまま追いかけるが、カノンはそう単純ではなく、「音型」が変化するものが多い。バロック音楽時代の曲はカノンが多い。カノンがさらに発展して複雑になったのが**フーガ**。

オペラは主催者である王や貴族が富をみせびらかすために上演されるので、豪華絢爛なものが求められた。「名作」レパートリーという概念がなく、常に新作が上演され、それは一回限りだった。無駄遣いをすることに意味があった時代なのだ。

歌舞伎も女性は舞台上上がれないが、ヨーロッパでも同じで、女性の役は、変声期前の少年を去勢して高い声を出せるようにした**カストラート**が演じていた。成功すれば、カストラートは富も得られ、国王の側近となり政治的権力を得た者もいる。

カトリックは絢爛豪華なおだが、プロテスタントは質実剛健だ。

モーツァルト 交響曲 40 番

三大ピアノ・ソナタ ベートーベン 「熱情」「悲愴」「月光」

ショパン 「英雄ポロネーズ」 ポロネーズはポーランドの舞曲という意味だが、これは舞曲ではない。

ラヴェル 「ボレロ」

ベルリオーズ 「幻想交響曲」

シューマン 「謝肉祭」

スメタナ 「モルダウ」

サン＝サーンス 「動物の謝肉祭」

ビゼー 「カルメン」

サティ 「ジムノペディ」

ブルックナー 交響曲第4番「ロマンティック」

リヒャルト・シュトラウス 「ツァラトウストラはこう語った」 ニーチェの哲学書を音楽にした。

ムソルグスキー 「展覧会の絵」

ニコライ・リムスキー＝コルサコフ 「シェエラザード」 千夜一夜物語を音楽にした。

プロコフィエフ 「ロメオとジュリエット」

ホルスト 「惑星」

ガーシュウィン 「ラプソディ・イン・ブルー」 ジャズとクラシックの融合。

バーンスタイン 「ウエストサイド物語」